

小笠原敬斎略伝

福田, 殖
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/18078>

出版情報：中国哲学論集. 9, pp.51-65, 1983-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

小笠原敬齋略伝

福田 殖

一

幕末の激動期、江戸の佐藤一斎の門下には多くの俊秀が出た。一斎の学術は「宋儒の学（程朱学）を奉ずると雖も、実は王文成（王陽明）を欽慕す⁽¹⁾」と評されているように、学統学派に必ずしも拘泥しない。そうした学風のせいもあって各種多様な人材が輩出した。一斎の最晩年（八十七歳の時に入門、一斎は翌年八十八歳で歿）に入門した楠本碩水は、門人は数千人を下らず。經学家あり。陸王家あり。程朱家あり。詩文家あり。世務經濟家あり。三谷圃・塚越雲・竹村蕢・本多楳・安積信・昌谷碩・菊地履・若山拯・沢村邁・吉村晋・山田球・川田興・永山貞武・佐久間啓・大橋順・楠本後寛は其の選なり。その他、列藩に仕へ、老職及び教官に任せらるる者は、あげて数ふべからず。盛なりと謂ふべし⁽²⁾。

と一斎門の活況を概括している。碩水からみれば、そのような学風をもつ一斎の学問も究極のところ道学を志向するものにはかならない。

先師の志は道学に在りて、經学に在らず。經説はただ其の緒余なるのみ。人、其の緒余を見て以て經学家と為すは、先師を知る者には非るなり。況んや以て詩文家と為すに於てをや。吾輩は但だ其の大を見るのみ⁽³⁾。

たしかに一斎は博学多識で、經学にも深く、また文章も能くする碩学大儒である。その多才ぶりが人々をして多様な見方をなさしめたのである。しかしながら、学統学派に執着しない一斎の学風は儒学の道統を一統一派に偏せず包括的に継承せんとするものであって、さればこそ佐藤槐の一斎行状に引用することく、

又曰く、濂洛（周・程）復古の学は、実は孔孟の宗たり。これを承くる者は紫陽（朱子）金谿（陸象山）及び張（南軒）呂（東萊）なり。異同ありと雖も、而も其の実は皆純全たる道学にして、決して俗儒の流に非ず。元に於ては則ち（劉）静修・（許）魯齋、明には則ち崇仁（呉康齋）河東（薛敬軒）餘姚（王陽明）増城（湛甘泉）、これ其の選なり⁴。

と強調するのである。一齋はその立場上、程朱学を信奉したが、宋・明を貫通して、儒家的な道の伝統の学問を包括的に受容しようとしたものと考えられる。したがって一齋の学問が当時、陽朱陰王とかげ口をきかれたのも、一統一派に色分けする常識的判断から出たものである。また、一齋が実際は陽明学者であるのか、朱子学者であるのかという議論は、妥当ではなく、むしろ、学統学派の枠組みにとらわれずに考えるべきものであろう。

前述一齋門下の楠本後覚（端山）は、世界と人生の根本に関する深い問いを発し、静坐による存養を重んじ、はげしい気魄を内包して、机上の道学、口さきだけの聖賢になるまいとして、思想的遍歴を経た後、崎門の朱子学を自己の信奉するものとして選択した。小笠原敬齋は、端山と同年に一齋の門に入った同庚の学友である。

敬齋は、折衷的な博雑な学風から、やがて陽明学へ、そして最後には朱子学へと進んでいく上で、端山から強い影響を受けた。碩水も、兄、端山と同じく崎門の朱子学を信奉したが、一齋門に入って敬齋と会い、一見して知己となった。端山・碩水兄弟との学問的切磋を通して敬齋もまた崎門の朱子学を信奉するに至る。

一八四〇年代から日本をとりまく国際的緊張は異常に高まり、外圧による鎖国から開国への動きが日本全体を揺がしていた。端山・敬齋が一齋門に入ったのは、嘉永四年（一八五二）で、碩水はやや遅れて安政五年（一八五八）に一齋門に入っている。このような国家激動の時期に時流の激しいきなかで彼等はよるべきものとして主体的に崎門の朱子学を選ぶのである。

敬齋は大名の子として生まれた。同族の唐津藩世子小笠原長行（敬一郎）と笠家の二敬と並称されたほどの秀才⁵で、氣象豪邁、小節に拘泥せず、高潔にして脱俗の志を抱き、文武ともにすぐれた特異な風貌の持主である。幕末激動期の状況の中で、真に自律的に生きんとし、自己の信ずる学問の実践に生の充実を示さんとしたが、志半ばにして斃れた異彩を放つ人物といえる。

最近、『楠本端山碩水全集』全一卷（福岡・葦書房・昭55刊）が出て、端山・碩水については広く世に知られるところとなった。端山・碩水と深い関係にある小笠原敬斎の特異な人間像を探究するための一手段として、彼の経歴を中心に述べていきたい。

二

小笠原敬斎（一八二八・一八六三）名は棟敬、字は義卿、通称は敬二郎、敬斎は号。また直方軒、白馬山人とも号す。文政十一年十二月五日（陰曆以下同）播州安志藩（一万石・豊前小倉藩の支藩）藩主小笠原長武の子として生まれた。母は側室武田氏（名は幾。武田治助娘）。同年一月十五日、端山（一八二八・一八八三）が平戸藩針尾島で生まれている。

敬斎は嘉永元年五月十一日安志を出立し、同月二十八日江戸着、小石川の藩邸に居住することとなった。時に敬斎二十一歳の夏であった。やがて謫母松平氏の命により、一時、水原氏の養子となるが、間もなく本姓に復した。碩水の「小笠原敬斎君伝」にいう。

謫母松平氏、君をして水原氏を冒かさしめんとす。君、百方辞避するも許されず。これを大橋訥庵に質す。訥庵曰く、恩は重し。従はざるを得ず、と。君已むを得ずしてこれに従ふ。既にして謫母、感悟して本姓に復することを許す。時に墨艦、浦賀に来たり、通商を求む。

敬斎が訥庵に養子の一件を質した年月は今一つ定かではない。しかし敬斎は嘉永六年春、訥庵の門に入っているので、その前後のことと思われる。同年六月三日に黒船が浦賀に来航しており、この養子の件は、この間のことであると推定してよいであろう。

養子に行き異姓を冒かすことは喩門では忌避された。碩水も佐佐姓から本姓に復しているが、つねに「異姓を冒かさざるは、これ孝の第一義」と言っていたという。月田蒙斎も「小笠原敬斎、他姓を冒かさざるの一著（件）已に大義を存す。英特の気象、想見すべし」と敬斎の態度を称賛している。

敬斎が江戸に出て来るまでの経歴については、定かではない。しかしながら、藩にあって公子にふさわしい教育を

受けたものと推測される。安志藩には藩校明倫堂があった。それは文学所と武学所の二つから成り、文武両道の教育を行っており、文学所では、小笠原流の礼法も授けていたようである。碩水の前記敬斎君伝によれば、敬斎は兵法に通じ、かつ射を善くしたとあるので、文武両面に關してすぐれた教育を受けていたものと思われる。この明倫堂教育の基礎をつくった稲垣隆秀（一七二三—一七九七）は大坂懷徳堂の儒者、中井竹山門で、安志藩学は懷徳堂の学風を汲むものであったらしい⁽¹⁰⁾。

江戸に出てきた敬斎は、はじめ安積良斎（一七九一—一八六〇）に就いて学んだ。良斎は、奥州二本松領安積郡山村の神職の家に生まれた。十七歳の時に江戸に出て一斎の学僕となり、四年後、林述斎の門に入る。二十四歳の時に駿河台に開塾したが、富士見坂の見山楼は大変に繁昌し、また『良斎文略』を著して名声都下に振うた文豪でもあった。一時、二本松藩敬学館教授となったが、ほどなく弘化の初め（一八四四）出府、嘉永三年（一八五〇）には幕府の御儒者を拜命、昌平校の教授として師一斎と共に教育に當った。敬斎はおそらく嘉永元年から三年までの間に良斎に師事したものだと思われる。良斎は朱子学者ではあるが、学派にとらわれない自由で包括的立場をとっている。良斎はいう。道は天下の公道なり。学は天下の公学なり。……学は一家を墨守するに及ばず。道の存するは皆学と思ふべし。程朱の諸賢は勿論なり。陸象山王陽明諸公の言も其の善なるは皆従ふべし。漢唐諸儒の説も取るべし。老莊申韓仏氏の言も善なるは皆取るべし。愚夫愚婦の言も亦取るべし。かくの如く胸襟豁大、古今を包括する勢にて、志の高大とも云ふべし⁽¹¹⁾。

このような包括的立場は、公道公学の名のもとに、あらゆる学問を包摂して折衷的で博雜な傾向を帯びる方向にいきかねない。

良斎は門戸の見を争って仇敵の如く相排斥するのは愚かなことで、かえって公平の道ではないと考え、王陽明は朱子学者の支離蔓衍の弊を矯める形で出現したのであるから、陽明の説は宋学より出てきたものと考えてよく、朱子の学と天地の差異があるわけではないとした。

道や学の究明を第一義とし、学統学派を最重視しない良斎の立場は、その師佐藤一斎から由来する。更にさかのばれば、一斎の師、中井竹山から発出するものといえよう。敬斎もまた当初においてこのような折衷包括的影響を多分

に受けたであろうことが想像される。

楠本端山はその頃の敬齋を次のように見ている。

嘉永四年辛亥、後覺（端山）一齋先師の塾に在り。公子も亦来たり学ぶ。公子の学、甚だ博雜にして宗とする所無^二し^一。

三

敬齋が佐藤一齋の門に入ったのは、嘉永四年、敬齋二十四歳の時で、端山はすでに在塾していた。時に一齋は八十の寿賀（十月二十日）を迎える年であった。

一齋は林家の塾頭をつとめ、また昌平校で教育の任に当たったため、立場上、朱子学を教授したが、王陽明の学説も受け入れる豁達な立場をとった。そのため前述のように朱子学者、陽明学者が同時にその門に出た。陽朱陰王という譏りを受けたが、一齋の立場は、その師、中井竹山の学風の影響もあって学統学派にとらわれないものであった。一齋は当時の学界と師、竹山にふれて次のようにいう。

本邦の儒流は享保中、盛なりと為す。今より之を視るに、仁齋父子物徂徠を以て魁と為す。後に及んで三輪執齋・五井蘭洲及び中井竹山兄弟有りて屈指の人物たり。仁齋の学は呉廷翰に原本^{もと}づきて自ら古学と称して見る所有り。徂徠自ら道ふ、初め李・王の古文辞を学び、因つて進んで古書を読み、是に於て始めて古經を解す、と。今必ずしも是非を論ぜず。之を要するに倒行逆施と謂ふべし。執齋は初め佐藤直方の門人なり。深く闇齋の学説を究め、遂に一変して餘姚（王陽明）を崇信す。蘭洲・竹山兄弟に至りては、則ち經学文章、前儒に卓越し、亦ただしくは餘姚を排せず。近世の儒宗たり。余少より数家に泛濫し、齡今八旬（八十）、学、志の如くなる能はず。第^た希^ひふ所は、則ち猶ほ存するもの有りと云ふのみ^一。

竹山は朱子学を基本にしたが、学派にとらわれることをきらい、自分の学は、林家の朱子学でもなく、山崎闇齋派の朱子学でもなく、一家の宋学であるとした^二。そして諸学の長短を吟味して、陽明の教説からも採るべきものは採

る主義であつた。一種の合理主義であり折衷主義である。一斎の王学精通の源泉は竹山から来ていると考えるべきであらう。

一斎門に入った敬斎は陽明学を攻究する。同窓で交つたのは、端山のほかに川田晦蔵（大洲の人）新官行蔵（肥後人吉の人）渋谷得蔵（入吉の人）岩瀬中蔵（大垣の人）少しおくられて碩水等がいた¹⁵。

端山もはじめは博覧の学風で、諸の末疏まで読書するところがあつたが、一斎の高弟の吉村秋陽・大橋訥庵について宋明の理学の講説を聞いてから旧習を脱離し、特に訥庵から最も強い影響を受けた。「此の人（訥庵）に遭はざれば、殆んど虚しく一生を過さん」という有名な言葉の示すように端山の以後の進む方向は聖学としての性理学（宋学）に決定せられたのである。この時、訥庵の学問は、いまだ高忠憲や劉念台といった朱王折衷の立場にとどまつており、陽明学の範疇を脱しきつていなかった。端山や訥庵が脱然として程朱に帰一するのは今少し先である¹⁶。端山の学術思想に関してはすでに詳細に論じられているので¹⁷、ここではこれ以上論及しない。

ともかく端山は訥庵の影響を受けて性理学へと進んでいく。この時期、敬斎はまだ陽明の学説を確守していた。しかしながら端山から強い影響を受け、嘉永五年冬には大橋訥庵門に入る決意を固める。嘉永六年春、端山は平戸藩に帰り、敬斎は訥庵門に入った。敬斎の端山宛書簡には、

御在塾の節は慇懃の思を受け、耳提の教を忝うし、靈に依つて此の学に見ること有り。袂を分つて以来、訥庵に追従して聖学の蘊底相質し、存養省察の工夫他事無く候。……教を受けてより已来、静坐の功、相用ひ少しく見る所有るが如し。故に之を左右に布く¹⁸。

とあり、端山の影響によつて此の学（宋学）に入ったことを明かにしている。敬斎入門当初の模様を訥庵は端山宛の書簡の中で次のようにいう。

御錦旋後、別に有志の士も相見え申さず。小笠原君・新宮両子は、始終懈怠なく来訪に候得ども、未だ感発の模様も之れ無く候。其の中小笠原の方は追々宜くも相成り申すべきやに存じ候得共、新宮は意外、浮泛の学にて喫緊の工夫など質問致し候事絶へて之れ無く候故、後來の成否、思束無く存じ候。弊塾も同様の者斗にて言ふに足る者無し¹⁹。

浮泛の学と評された新官行蔵は結局、陽明学信奉の立場を変えなかった。この時、敬斎が学んだ学問は、聖人志向の学（聖人の道の体認）である。それは義と利の弁別をきびしくし、正統と異端を峻別して義理心性を根源から究明しようとするものであった。訥庵は、此の学は、単に真面目なだけで、激昂の気象に乏しい者では駄目であり、自律的に生きることのできる精神的強者であることが要請され、聖賢を志向する高い気概が必要であるとされた。

兎角此学は豪傑にして聖賢と申様に之れ無くては相叶申さず。志は伊尹、工夫は顔子と申物故、兼併の難き筈にて、其人なきも尤の事に御座候²⁰。

と訥庵は此学を勃興する人材の少なきを憂え、当時の儒学界を見渡して次のようにいう。

当今の儒は其の名のみ儒にして実は自ら視ること併優侏儒に均しく候故、牧伯（大名）もそれを視る事、書家画人と異ならざるは、浩歎の至り、何率弊風洗刷致候て、聖学の為に光輝を発度事と存候は、猶功利腸（心）に之れ有るべきや、御示教下さるべく候²¹。

この激越で容赦ない亢進ぶりはどこからくるのであろうか。それは今こそ聖学を勃興すべきであるという危機意識と結びつけて理解すべきであろうか。正しい道の伝統が見失われ、學術が不明になり、異端邪説がはびこれば、国家社会は無秩序な状況の中で混乱におちいらざるを得ないという危機感が彼等の中にあり、それが聖学再構築へとやらせていたとも見られよう。訥庵のこの書簡は嘉永六年五月六日発信とある。このころ訥庵は朱子学の立場に立って西洋学を異端邪説として排斥した書物『闢邪小言』を著している。聖人の道へのはげしい取り組みゆえに激昂するという行動様式は、程度の差こそあれ、訥庵・端山・敬斎・碩水において共通に見られるものである。敬斎が訥庵のところで学んだものは勿論、聖学（聖人志向の学）にはちがいないけれども、それにもまして激昂の気象であったかも知れない。

四

その後、訥庵と端山の進む道は次第にわかれていった。端山は程朱学に帰一の後、更に崎門の朱子学へと傾倒して

いった。訥庵の方は志士の行動へと進んでいき、文久二年、坂下門事件發生に先立って捕えられ、やがて非命に斃れた。端山はかつて弟の梅窓に対し、「只今都下ニテ道德性命之学第一ハ大橋順藏」と感激をこめて書きおくれた(22)。聖人志向の学の手引きをしてくれた訥庵ではあったが、両者の關係は文久元年に決定的に悪くなった。端山は敬斎宛の書簡(23)の中で、「大橋丈の学は窮理偏勝して存養の終始たるを知らざるが似し」とその学問を批判し、「春初に書を渠に致して、之が復姓を勧むるも今に至るまで寂として音響無し。因りて頃る復た煩を免れざるも再び告げんとす。知らず、渠能く改むるに勇あるや否や」と怒りを表しながら、「吾曹学問の事有るを知るは実に渠の力なり。故に軽しくは之を絶たんと欲せず」と絶交を思いとどまっている。文久二年二月二十七日の敬斎宛の書簡では「大橋丈、首春十二日を以て速へらるる事、已に尊聴に達せしや。駭愕之を久しうして心悸已まず。ああ天下の大、一清議の士を容るる能はず、如何如何。伝聞洵々として未だ的信を得ず、其の詳を聞かんことを欲す。但だ奇禍自りて来たる所、丈も亦美に之を招く者有り。此れ則ち丈のためにひそかにこれを憾む」と悲痛の情を告げている。

敬斎は端山の影響を受けて陽明学から程朱学へと転じたが、更に崎門の朱子学へと進むのには、碩水の影響が最も強かったようである。敬斎と碩水の出会いは安政六年三月二十四日であった。前年十一月碩水は佐藤一斎の門に入り、大橋訥庵や若山勿堂の講義に出席するかたわら、在府の名士を訪ねて学問研鑽に励んでいたが、敬斎と相会うや、一見して知己となった。楠本正翼の「碩水先生伝」によれば、

一時の名儒、金子霜山・春日潜庵・大橋訥庵・吉村秋陽・池田草庵・尼崎修斎の若きは皆交はらざる無し。而して小笠原敬斎と契合すること最も深し。嘗つて曰く、吾、天下の士に交はること少なからず。而して一見知己を以て相許す者は敬斎一人のみ、と(25)。

端山・碩水・敬斎の信奉する崎門朱子学は、直接には月田蒙斎を通してのものであった。崎門学脈の系譜は、山崎闇斎―三宅尚斎―久米訂斎―宇井黙斎―千手廉斎―千手旭山―月田蒙斎となる。

月田蒙斎は肥後玉名郡の人で、京都に遊学して千手旭山に師事、実理の学をおさめ、知行を貫く存養を重んじた学者である。千手旭山から道学(崎門の朱子学)継承の寄託を受けて、旭山の著『中庸講義』五卷、『樽桑儒海』『自求録』を贈られた人物である。月田蒙斎については今まで知る人が少なかったが、最近はじめてまとまった紹介が

出た²⁶。

碩水は安政三年二十三歳の正月、月田蒙齋を訪ね、その著『蒙齋隨筆』を読んで感動したが、その後、東遊したため、空白があった。再び蒙齋と書簡の往復が頻繁になるのは、安政六年から万延元年にかけてで、この間約五年の歳月が経過している。その間、碩水は弟の準平（松陽）を蒙齋のところに遊学させている。

敬齋は蒙齋のことを碩水と松陽とから聴いて知るところとなった²⁷。敬齋は蒙齋にあてて文久二年に書簡を書いてくる。この手紙は結局その時は出さず、翌文久三年、副書をつけて七月二十七日付で蒙齋に出している。敬齋のこの書簡は謙虚にして鄭重を極め、如何に蒙齋に就いて学びたいかを切々と訴えている。以下、この書簡の概略を述べる
と次の通りである。

当今の儒者はおおむね記誦詞章の訓詁学かあるいは事功名利を企図するもので、あきたらず、道德風俗の退廃に儒者が無関心で、正学に志す者がいない。経義を考え経済を語り輻略（兵法）を弁じる者は都下その人に乏しくないが、敬義（崎門の朱子学）躬行の君子となると、先生に望みを托するほかはない。大橋寿次（訥庵の養子）の書簡や先生が碩水に答えた書簡を反復熟読して此の道の在る所をいよいよ信ずる気持になった。そこで門下に至って教えを受けたいと思っているが、目下小倉藩の政務にしばられて身うごきがとれない。そこでせめて書簡でお教えを乞いたいとして、知行に関する真剣な見解を述べている。また副書では、文久三年正月に近藤・泥谷・牧山の三人が来訪、先生の学についてつぶさに語ってくれた。端山からは先生の大著『蒙齋隨筆』の序文を示され、六月に碩水が『蒙齋隨筆』二巻を寄こしてくれた。そこで先生の学問内容が把握できた。道の不明なること久しい。幸に先生のような方がおられるのだから、先生の門を望んで入門しないものがあるうか。私が先生を慕うことがそのようであり、土地が近いことがこのようでありながら、お側にお仕えすることができないでいるのは、そもそもまた命であろうか、と嘆いている²⁸。

敬齋は遂に蒙齋に会うことはできなかった。なぜならば、その後一か月あまりして敬齋は急死したからである。

蒙齋も敬齋に期待するところ大なるものがあつた。碩水宛の返書の中で、敬齋のことを「英特の氣象」とほめ、また次のようにいう。

近ごろ普徳凋謝し、道學日に微かなり。吾老師千手翁も亦去年八月を以て世に即く。斯道の託、果して安くに在りや。敬斎の一書、誠に空谷の跫音なり²⁹。

蒙斎のこの期待感は、むごくも裏切られる結果になってしまう。碩水の「敬斎君伝」に

蒙斎嘗て其の後に書して曰く、卑遜撝謙の言を極めて正気矯然たり。風度軒昂にして人をして敬を起さしむ、と。また曰く、癸亥（文久三年）の秋、君、此の書を賜ふ。未だ時を逾えずして君、世に即く。故を以て此の文を読む毎に未だ嘗て斯の知己の人に負くを歎ぜずんばあらず。

と蒙斎の文を引用しているが、蒙斎の痛惜の念が切々と伝ってくる。

蒙斎は敬斎の中に自己に共通する硬質な志操をかいまみたのではなかったか。千手旭山から贈られた道學を伝えるための証左としての著書ははじめ敬斎に贈ろうと考えていたらしい。道學の伝統継承の望みを敬斎に托そうとしたのである。「過庭餘聞」に次のように記す。

樽桑儒海ト自求録トノ二書ハ、蒙斎カラ端山ヘ伝ヘタモノゾ。中庸講義ハ其ノ後予ニ讓ツタノゾ。千手謙斎（旭山）ヨリ蒙斎ヘ伝ヘタ書ハ、最初敬斎ヘ伝フル心デアッタトミエルガ。敬斎ガ死ンダカラ端山ヘ伝ヘタモノゾ。其ノ事ハ蒙斎カラ千手嘉門太郎ニ與ヘタ書簡ニ見エテ居タゾ。嘉門太郎ガ其ノ手簡ヲ見セタコトガアルゾ。嘉門太郎ハ謙斎ノ子ゾ。

五

敬斎が大橋訥庵門に入ったのは嘉永六年春二十六歳の時であったが、その年の夏、六月三日浦賀に黒船が来航、世情騒然となり、敬斎も激奮して、自己の見解を述べている。

曰く、議論多しと雖も、之を要するに三を出でず。曰く、通商は許すべからず、と。此れ易ふべからざるの論なり。曰く、姑且く之れを許し試行すること数年にして其の利害を察して而る後に之れを処置せん、と。此れ怯懦小人の見にして用ふべからざるなり。曰く、古今は異なれり。宜しく時に随ひて法を變じ、之れを許して可なり、と。此れ

も亦無稽の妄説にして行ふべからざるなり。聞く、墨夷、耶穌教を奉ず、と。夫れ耶穌教は祖宗の嚴禁する所にし
て聖道の容れざる所なり。豈に古今異なれり。宜しく時に随ひ、法を變じて之れを許して可なりと謂はんや^⑩。
そして通商より決戦をえらぶべきで最悪の場合は將軍自身が指揮をとるべきであるとした。譜代大名の公子の立場
での発言であるが、同時にこうした排外主義的攘夷思想は朱子学からくるものである。右の趣旨の一文は幕府に上呈
しようとしたが故あつて果さなかつた。

更に水戸の徳川斉昭にも一文を草して上呈しようとしたが、その言激烈なるを以て、通ずる者がなく、これもまた
果さなかつた。

当時、歴史の趨勢は鎖国から開国へと動いていた。やがて幕府は開国にふみきるが、それは主体的判断というより
も、外圧によるものであつた。敬斎の考え方は、今からみると時代に逆行するものであるといえるかもしれない。し
かし後世の者が敬斎の考えを冷やかに嘲笑することは許されるであろうか。敬斎は日本の主体的立場での選択を自律
的に決定しようとしたのである。開国後も、敬斎のように主体的、自律的のものを考える人がいたことが幸いしたと
も考えられる。

万延元年、敬斎三十三歳の時、宗藩の小倉藩主小笠原忠嘉が国許で病にかかり再び起たなかつた。そこで敬斎を
その嗣としようとした。敬斎は固辞し、木曾山中に身を避け、結局、兄の安志藩主棟幹が、宗藩藩主を嗣ぐこととな
つた。翌文久元年七月江戸を立立し、八月小倉に入った敬斎は学校の事を司り、藩政に參與(政治顧問)した。

時に藩老島村志津摩(貫倫)と確執があり、結局、敬斎が政治局面からしりぞけられた。

文久三年五月、外国艦船が下関に来航、毛利藩はこれを攻撃した。海峡をへだてた小倉藩では藩論が紛糾した。敬
斎は事は外寇にかかわるので傍観して救わないでいいだろうか、攘夷の命が未だ降らないけれども、わが陸地に上ら
してはならない。向うが砲撃してくれば全藩をあげて戦うべきである等、理非曲直をただす議を言上したが、敬斎の
議は行われなかつた。そこで敬斎は京都に上り、建白論列して、国家のために尽力しようとした矢先、にわかにな
な事故に遭つた。

時に新たに射場を開くに、君、数矢を発し誤まつて左掌を傷つけ、遂に以て病を成す。医の薬を進むる有りて之れ

を服す。俄かにして危篤、將に瞑目せんとす。侍者曰く、心氣を堅定にされよ、と。君、曾子の語を誦し、且つ曰く、心氣堅定すること此の如し。豈に別に堅定有らんや、と。言畢りて逝く。實に九月十四日昧爽（夜あけ）なり。享年三十六。小倉大隆寺に葬る⁽³¹⁾。

敬齋の死因については、今一つ定かではない。『過庭餘聞』では左掌の傷がもとで破傷風になった話が載っている。また、手の動脈を切ったのが原因という説もある⁽³²⁾。現在、敬齋の墓は小倉藩主の菩提寺である北九州市小倉北区寿山町の広寿山福聚禪寺の境内、第八代藩主と第九代藩主（敬齋の兄忠幹）と同域にあり、法名は崇信院殿恭道慈敬居士である。

敬齋の人柄は、氣象豪邁で、俗氣のない人であつたらしい。碩水はいう。

敬齋ハ豪邁ナ人デアツテ、俗氣ト云フモノハチツトモナイ。胸中ガ洗ヒ上ゲタヤウヂヤ。経説ハ深クハナイ。詩文モ鍛鍊ガスクナイゾ。話ノ間二人モナニトナウ俗氣ノナイヤウニナツタコトゾ。

知己ト云フハ敬齋ノコトゾ。敬齋ガ志ヲ得レバ予モ得ルニ相違ハナイゾ。予モソノ心ゾ。コレデコソ真の知己ト云フモノヂヤ⁽³³⁾。

碩水はまたいう。

其の志操、凜乎として冰雪のごとし⁽³⁴⁾。

敬齋には三人の子があつたが、長男と三男は共に夭折し、次男の敬信（通称總之助）が跡を継いだ。敬齋の室は生野氏（名は藤、後、純操院と称す）で幕府小普請生野金三郎の妹。

碩水は敬齋の遺族とその後も文通があつたようで、明治四十一年の小笠原敬信から碩水宛の手紙が残っている。それによると敬信の母、純操院は「本年七十歳ニ相成候得共、幸ニシテ壮健」とある。また敬信は明治二十七年には家産を破り尽し母親に心配をかけたが、その後戦役に従い、異郷に在ること一年十か月、帰朝後官途につき、以後、努力の結果、陸軍監獄長に任ぜられるに至つたことが、こまごまと記されている。敬齋遺族の家は一度は傾きかけたが、再び盛りかえしたごとくである。碩水にとって常に氣になつていたのである。次の文を読めば碩水はおそらく、敬齋の命日には亡き知己敬齋を偲んでいたようである。

晩秋望前の一日は、亡友敬齋先生源君の忌辰なり。謹んで茶酒を具へ祭りを其の靈に致す。君の逝きてより四十六年、氣象風采、宛ら目前に在り。嗚呼哀しいかな。尚くは饗こひまがはけよ(35)。

注

- ① 佐藤梶「皇考故儒員佐藤府君行狀」(『楠本端山碩水全集』全一卷(福岡・葦書房・昭55刊)中の「朱王合編」卷一所収)
- ② 『碩水先生余稿』卷一(同上全集所収)
- ③ 同上。
- ④ 前記①に同じ。
- ⑤ 日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(吉川弘文館・昭56刊)「小笠原敬次郎」の項による。
- ⑥ 碩水の「小笠原敬齋君伝」(『朱王合編』附録)では、「考、諱は長武。長子、諱、棟幹嗣たり。君は即ち第二子にして側室武田氏の出なり」とあるが、『豊前叢書』第四卷(豊前叢書刊行会・国書刊行会・昭56刊)「歴代藩主下」小笠原忠幹(九代の項によれば、兄、棟幹(のちに忠幹)は「文政十年(一八二七)九月十四日播州安志に生まる父は長武、その二男也」とあるので、それによると敬齋は三男ということになる。
- ⑦ 『朱王合編』附録所収。
- ⑧ 楠本正翼「碩水先生伝」(『朱王合編』附録所収)
- ⑨ 万延元年閏三月発信の月田蒙齋の「復佐吉甫書」は『朱王合編』巻四に収められているが、これは節略されたもので、九大文学部所蔵「碩水文書」月田蒙齋書簡(番号一・一八七)は原書簡である。
- ⑩ 安志藩学については、笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』(下)安志藩明倫堂による。
- ⑪ 『良齋閑話』巻之上(井上哲次郎『日本朱子学派之哲学』第四編第四章「安積良齋」所収)
- ⑫ 「敬齋公子履歴聞見畧録」(『端山先生遺書』巻四)『全集』所収)
- ⑬ 「言志晚録稿本」(高瀬代次郎『佐藤一齋と其門人』南陽堂本店・大正11・八四四頁所収)
- ⑭ 『佐藤一齋と其門人』第一章(五)「京阪の試練」。中井竹山に関する近著としては、小堀一正・山中浩之・加

地伸行・井上明大『中井竹山・中井履軒』（叢書・日本の思想家24・明德出版社・昭55）及び、宮本又次『町人社会の学芸と懷徳堂』（文献出版・昭57）等があり、詳しい。

(15) 楠本正脩録『過庭餘聞』（『全集』所収）

(16) 碩水の「端山先生楠本伯子墓碑」（『朱王合編』附録所収）による。なお訥庵については、並木栗水の「先師訥庵大橋先生略伝」（『朱王合編』附録所収）に「其の学初め姚江を主とし、かたわら禅理を究め、晩に程朱に帰す」と学問の変遷を記す。

(17) 岡田武彦『楠本端山』（叢書・日本の思想家42・明德出版社・昭53）同じく「楠本端山と碩水」（『楠本端山碩水全集』附録解説）

(18) 『幕末維新朱子学者書簡集』七五頁。

(19) 同上 一五頁。

(20) 同上 一六頁。

(21) 同上 一七頁。

(22) 同上 五九頁。

(23) 『端山先生遺書』巻二 與源義卿書辛酉

(24) 同上、答源義卿書（ともに全集所収）。

(25) 『朱王合編』附録

(26) 難波征男『月田蒙斎』（叢書・日本の思想家・明德出版社・昭53）

(27) 「嘗て初めて先生の徳を楠本準平と佐佐孚嘉（碩水）とに聴く」（與月田蒙斎先生書―『朱王合編』巻四）

(28) 「與月田蒙斎先生書」（『朱王合編』巻四）

(29) 「復佐佐吉甫書」（『朱王合編』巻四）

(30) 「小笠原敬斎君伝」（『碩水先生遺書』巻七）

(31) 同上。

③② 前記『明治維新人名辞典』小笠原敬次郎の項及び小田富士雄・有川宜博・米津三郎・神崎義夫共著『北九州の歴史』（福岡・葦書房・昭54刊）のⅢ近世5.尊王攘夷の時代（米津三郎担当）に、「小笠原敬次郎は解職されて江戸に赴くことになったが、出発の数日前、弓の稽古中に弦で手の動脈を切り、出血多量で死亡した」（一五〇頁）とある。

③③ 『過庭餘聞』

③④ 「小笠原敬齋君伝」

③⑤ 九大文学部所蔵「碩水文書」小笠原敬齋書簡（番号六〇四）

③⑥ 『碩水先生遺書』巻六「祭源敬齋文」

（付記）この小論は昭和五十六年度文部省科学研究費「幕末明治期に於ける崎門学の研究」の成果の一部である。